校長室だより～燦燦～ №８４７

チャットＧＰＴ

2023.9.16

「チャットＧＰＴ」が社会に及ぼす影響について話題になっている。業務の効率化や新規事業創出につながる画期的な技術である。その一方で、偽情報のまん延、プライバシー侵害、人間の思考力低下などの弊害も予想される。大学をはじめ教育現場でも懸念が広がっている。

太宰治の「人間失格」の読書感想文を１２００字以内で、といった指示に、即座に答えてくれる。子どもたちが利用しかねないのは当然である。大学生のリポートに悪用されるだろう。こうした使い方が広がれば、自ら考えて文章を作成する能力が失われる可能性がある。やみくもな使用は、あまりにも危険で、一定の歯止めをかける必要がある。果たして、作文や論文に使われたとして、判別できるのだろうか。自分の力で文章を作らなくなれば、思考力を身に付けることが難しくなるだろう。

大学などでは、次のような動きが出ている。情報を集めるサーチのみで研究をするリサーチという検証を欠いているため、学術リポートとしては致命的な問題点がある。リポートや学位論文などの課題について、原則として使用を認めないが、教員の許可があれば指示の範囲内で使うことを許可する。リポートは、学生本人が作成することを前提としており、生成系ＡＩのみを用いて作成することはできない。学生が変化を先取りする以上、禁止は難しい。大学教育に良い形で活用する方向性で学内の合意が得られた。学生側としては、何ができるかを知ってしまった以上、禁じるのは難しい。

「ＡＩ vs..教科書が読めない子どもたち」「ＡＩに負けない子どもを育てる」の著者である新井紀子国立情報学研究所社会共有知研究センター長・教授は、次のように言っている。まず、チャットＧＰＴが追求しているのは、もっともらしさで、正しさではない。その上で、正しい情報のみから学習すれば、チャットＧＰＴが１００％正しい答えを出せるようになる、との誤解があるようだ。しかし、研究ではＡＩは自然言語処理の過程でハルシネーション（幻覚）を起こす可能性があることがわかっている。チャットＧＰＴの答えが確率と統計に基づくものである限り、正しさについては今後も保証されることはない。だから、自分がよく知っていることに関する下書きにはチャットＧＰＴは使える。自分がよく知らないことには使わない方がいい。高い安全性や信頼性、真実性が必要なことには使ってはいけない。

新井先生の話を受けて、自分がよく知っていることである校長の話「１学期の終業式で何を話すか」を考えていたときに、試しにチャットＧＰＴを使ってみるかと考えた。だが、踏みとどまった。きっと参考にもならない。定型かつ基本的で面白みのない、ありきたりの内容になるだろうと思った。それでも、興味はあった。

ある大学の見解に、人類はこの数ヵ月でもうすでにルビコン川を渡ってしまったのかもしれないとある。どんな未来をもたらすにせよ、もはや止められない。教育界も、走りながら対応を考えていかなければならない。